

研究ノート

幼児の表現力を培う — 幼児の身振り表現と言語表現の関係 —

A study on how to cultivate children's expression
— A connection between children's expression of gesture and language —

前田美智代

要約：文部科学省は、平成 21 年度より幼稚園教育要領等の改訂を行うとしている。今回の改訂では、特に言葉で表現すること、言語力の基礎を培うことが強調されている。このことは、言語による人との会話やコミュニケーション能力が不足していることを憂いてのことと察するが、これらの力是一朝一夕に身に付くとは考え難く、日々の生活の中で育んでいくものと承知している。保育や教育の場においても保育者や教師の指導・援助が必要である。ところで、幼児期にはこの時期の独特のものの見方や感じ方があり、それらを踏まえての指導が求められることを指摘したい。遊びや感動体験を通して思うこと、考えること、感じる事があつての言語力なのであり当然のことながら表現力との関わりでもある。さらには、人間関係構築への基礎を作る力でもある。本稿では、具体的な保育実践に基づいて、幼児の表現活動の中の身振り表現と言語表現のかかわりを考察することによって、幼児の独自性を生かした表現力を培う方途等を明らかにしたい。

Key Words：言語表現、身振り表現、自己表現、人間関係、アニミズム的思考

はじめに

幼児の表現には、絵画・制作表現や音楽表現がよく知られており、集大成として絵画展や音楽会を華々しく催す園もある。しかし、絵画展や音楽会に向けて幼児は周りの大人の期待にこたえるために必要以上に上手に描きたい、上手く歌いたいという思いが先行し負担が多きいのではないかと危惧する。

それに比べ今回のテーマである身振り表現は、特別な手立てや技術等を必要とせず、日々の生活の中で幼児が素直に思いや感じたことを表現する方法である。身振り表現は、まね遊びや模倣遊びが基になっており、幼児がよく用いる表現方法である。それだけに幼児への負担が少なく、表情や仕草から幼児の思いが汲み取りやすい点も良さである。

また、幼児期は言語による表現の仕方も次第に身につく。その比重は長ずるに従って身振り表現よりも言語による表現が増幅している。『子どもが育つみちすじ』¹⁾

で服部祥子は「幼児期後半（3歳～6歳）は知識欲も目覚しく語彙はおびただしく増え文章も次第に複雑になり様々な考えや気持ちを表現することが出来るようになり、質問をうるさいほど大人に向ける。大人は子どもの意欲、探究心、勇気、冒険心、進取の気性といった心を思いきり伸ばしてやるのが幼児後期の最大の課題である」と記している。この論から幼児期の言葉の獲得については、幼児の伸びようとする力を大人が援助することが不可欠であると理解する。

それにしても、最近の幼児は言葉数を多く獲得しており、よく話す。しかし、本当に理解しているのか疑問に感じる時がしばしばある。とは言え寡黙な幼児も多い。幼児がその年齢にふさわしい言語を獲得し、表現するためには、感動体験の場があることや遊びや感動体験を通して得たことを表現する機会が必要である。ここで留意したいのは、いきなり言語による表現を求めないことである。幼児には言語で表現するまでの過程で体を通して理解し表現する、いわゆる身振りによる表現が多くみられるからである。幼児の表現には身振り手振りによる表現と言葉による表現が混在していることが珍しくない。

幼児は体を通して今していることを意識し一層理解を深めるのである。感情表現の現われでもあり、それによって人とのコミュニケーションを円滑にしていく。まずは表現しようとする事柄がそれぞれの幼児の内に存在することが第一義であり、言葉で表現することが先行するのではない。『保育の原点をさぐる』²⁾で渡辺保博は「ちゃんと言葉で言っちゃおうだと言うことになる」と言葉でいえるようになりますが、これをこそ言いたいという気持ちが消えてしまうような指導例がいくつもみられたものです」と述べている。発達途上にある幼児には言葉表現だけでは語りきれないことがあり、ましてや言葉数の多少や難しい言葉の獲得に終始することは幼児の発達の妨げになると解している。

次項では、実践例に基づいて幼児のものの見方や感じ方についての理解を深めたい。

1. 実践にみる幼児の表現

平成20年6月13日 A市N幼稚園（4歳児クラス）

単元 蝶々（飛ばない蝶々）

この幼稚園では身近な自然を題材にし、幼児の感性を培うことを目標としている。

今年は、蝶々がたくさん見られた。この幼稚園でも幼児達が園庭で青虫を見つけ毎日世話をしながら蝶々になる日を楽しみにしていた。ある日、さなぎが蝶々になった。蝶々は飛ばずじっとしている。幼児達は飛ばない蝶々に驚いたり、不思議に思ったりしながら蝶々が飛ぶのを待った。飛ばない蝶々を見るのははじめてのことであろう。さぞ新鮮な思いで見たに違いない。と幼児の蝶々を見守る様子から察した次第である。

次の実践例は、蝶々を見たあとの保育である。

保育者の言葉・働きかけ	幼児の言葉・表現（様子）
<p>（蝶々と遊ぶ経験）</p> <ul style="list-style-type: none"> 虫ケースの蓋を開ける。 <p>・あまり言葉は発しない。（幼児達の様子を見守り、その眩きに共感する） （やっと蓋が開いた）①</p>	<ul style="list-style-type: none"> 全員ケースに注目し、蓋が開くのを待つ。（その間、ケースの中の蝶々を見ながら「髭がある」「目がある」等、思いのまま呟く。 蓋が開いても、飛ばない蝶々に男児が「飛んで」とささやく。 別の男児も「飛んで」と言う。（その間、他児達は蝶々に注目している。

<ul style="list-style-type: none"> ・ここでも言葉は発しない。② ・この間、幼児と共に蝶々を見ながらその歓声や喜びに共感している。 <p>（部屋で話し合い）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蝶々はどうだった？ ・飛ばなかったね どうしたのだろう？③ ・骨が軟らかいの？④ ・さっきの蝶々は子どもなの？⑥ ・生まれたばかりだったの？⑦ ・どうして生まれたばかりって知っているの？（この事実は知っている）⑧ ・いいこと教えてもらったね。 ・でも少しだけ飛んだよね。 ・なるほど、少し休むと元気になるのか⑨ ・子ども達の様子を見て、蝶々になることを楽しんでいると捉える。 ・かわいい蝶々さんだね。 ・「なるほど」と共感し、A子をPUする。 PU＝1人抽出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・また、別の男児が指を入れると、蝶々が、男児の指に止まった。他児は大喜びの様相である。 ・次々と指を入れる。（蝶々はケースから飛んで、花に止まったり幼児達の頭や洋服に止まったりする） ・あんまり飛ばなかった。（幼児達のイメージではケースの蓋が開くとすぐ飛ぶと思っていたのだろう） ・男児 骨がまだ柔らかいから ・女児 まだ子どもだから、お父さんやお母さんみたいに飛ばないのよ ・多くの子どもが頷く（納得した様子）⑤ ・別の女児 さっき生まれたばかりだから飛ばないのかな？ （この女児の思いにも多くの幼児が共感する） ・大きく頷く。 ・園長先生が教えてくれた。 ・皆、満足そう。 ・少し元気になったから。 ・休憩したから元気になった。 ・ここでも大きく頷く。 ・話し合いが終わるか否か、手を羽にして蝶々の表現をする。 （身振り表現の始まり） ・満足そうな様子。 ・「あまり飛ばないの」と言いながら小さな蝶々を表現する。 ・「まだ子どもの蝶々だから」と言いながら表現する。 ・A子 保育室の中央で両手を小さく動かす。⑩ ・見ていた他児が「飛んで」と声をかける。⑪ ・A子 少しだけ動く。
--	--

・ この蝶々さん、あまり動かないね	(他児から次の共感の声が聞かれる) ・ 生まれたてだから。 ・ 休憩している。 ・ 小さいから。
・ そうそう、さっきの蝶々さんもそうだったね。	・ どの子も満足そう。

このあと、次々変わりあって蝶々の表現をし、互いの思いを知ることになる。

- ①、②・・・保育者は共感のみで具体的な言葉は発していないが、幼児が話しやすい雰囲気保育者が醸し出している。
- ③、⑧・・・平成21年度に改訂・実施される幼稚園教育要領の言葉の領域について『特集 幼稚園教育要領・改訂のポイント』³⁾の中で無藤隆は「どうしてだろう、こういう理由ではないか、など思考のための言葉の獲得が必要である」と強調している。ここでもどうして等の問いかけにより幼児達は、一層深く思いを巡らせ、考えている。
- ⑤・・・幼児同士が互いに理解しあう様子がうかがえる。
- ④、⑥、⑦・・・保育者は反復だけにとどめている。幼児の思いを受け止める結果になる。
- ⑨・・・この話し合いを通して話したことを、受け止めてくれる相手がいることで、話したい意欲が一層盛り上がりを感じ入った。
- ⑩・・・身振りへの移行。
- ⑪・・・友達の身振り表現を見ながら、そこに意味を見出し自分の思いと重ね合って各自が発言している。コミュニケーションの始まりととらえる。

約20分程度の保育ではあるが、幼児が思いを表現する上で言語による表現だけでは、情感を感じ取れない場合がある。そこに身振り表現が加わるとことによって幼児が体験した蝶々への思いが、表情や仕草を通して共有でき臨場感が漂う。

2. 言語発達に必要な条件

実践例の中でも幼児達は、様々な言葉を発している。友達の思いを受け止め、保育者からの問いかけにも適切に応えている。ここで人は言葉をどのように獲得していくのかその過程を辿っておきたい。『発達と指導Ⅲ言語』⁴⁾では言語発達に必要な条件として、フランス人医師タールの言葉を引用して次のように記している。

言語獲得のための必須条件

- 「①人とまじわる・・・他者からこの技術を伝えてもらうため
②聴力の助け・・・最初の教えを聞き取るため
③模倣能力・・・反復を容易にするため
④知能・・・理解するための材料である観念を得るためには、人間に与えられた程度の知能が必要」

となっている。

「また、模倣という生得的傾向は、いわば幼児期に近ければ近いほど活発で明敏である。人生のこの時期にあつては、あらゆる模倣能力が発声発語器官に集中するので、模倣によって話しことばの機制を把握することは、子どもにとっては、青年よりもずっとたやすいことなのである」と記している。以上の事柄から言語を獲得する時期として乳幼児期が大きな節目であることが理解できる。乳幼児期は言語獲得の初期でもあり、急がず丁寧に関わること、個人差があることに配慮しながら一人ひとりにそった指導や援助を要することは言うまでもない。実践例には上記の必須条件が網羅されていることに気付いた。

3. 身振り表現と言語表現

実践例の中では幼児が興味にそった体験をした後、話し合いをしている。自分の思ったことや感じたことを表現するという意味で話させる。「話し合いの方法をとるが、討論をするとか会議をするということではない。仲間の輪の中でかわるがわる話し、一つの話題によって個々それぞれが自由に話すこともあれば一つのことを1人では十分述べられなくて皆で言い合い聞きあっていくうちに、互いに分かり合い深まっていく」と広岡キミエは『幼児の内面を育てる』⁵⁾で論じている。実践例の中で話し合いの後、体が自然に動き出して話しと身振り表現が混在した状態になっている。この現象は、うれしい気持ちや楽しい気持ち、その意味が理解できたという表れである。また言葉不足の補充にもなっている。身振り表現と言語表現では、どちらが先かは鮮明ではないが低年齢児には、身振りが先行していることがうかがえる。例えば2歳児等は保育士が「ダンゴ虫がね」と話しかけただけでダンゴ虫になって「ねんねしている」とか「おはよう言った」などと話す。このように体の表現の助けを借りて幼児は、自分が知った意味や感じたことを素直に表現できるものと解釈する。模倣やまねる力はや

がて学ぶことへとつながっていくことでもあり、幼児期はとにかく模倣遊びやまね遊び、みたくて遊びが盛んになされる時期でもある。身振り表現を十分楽しみ、言語獲得へと成長していくものと受け止めることができる。また、特に一人ひとりがPUされて表現している時、PUされた幼児が主役ではなく、それを見ている他児も同じ思いで見聞きしていることが多い。この姿は人に関心を抱き、人間関係作りの第一歩と考えられる。

4. 表現の基になる生活

表現を可能にするためには次のような生活をする必要が必然となってくる。

(1) 聞くこと、(2) 見ること・触れること、(3) 話すこと(4) 身振り表現をすること等である。これらは日常生活の中で行われていることであるが意義を確認しておきたい。

(1) 聞くこと(よく聞かせる)

幼児は、身近な人々から声をかけられたり話しかけられたりすると喜ぶ。保育所や幼稚園でも人の話を聞くことだけでなく、絵本や紙芝居などのお話を聞くことも楽しむ。しかし、幼児の「聞く」実態はさまざまであり、時として聞かない現実に出くわすことがある。絵本を読む準備をすると大喜びで保育者の膝元に集まってきたものの1分もすると騒がしくなる。気の散りやすい幼児達が集まると刺激しあい不安定になる。保育者は話す内容を精査し、幼児の心に響く話をしたいものである。

(2) 見ること・触れること(目覚めさせること)

幼児が表現意欲を高めるためには、何をどのように見せるか触れさせるかと言うことが保育者の大きな悩みでもある。幼児の興味や関心事を見せると言うが、複数人の幼児の興味や関心にいつも付き合え切れるものではない。幸いなことに幼児は、身近な自然や社会とのつながりを持ちながら見ることに、見るものを広げていく。すぐ側にある自然に目を向けさせながら、そこでの様々な営みや事象に目を留めるようにし、表現活動に導くことができることに集中させる近道かもしれない。ここで得られる感動体験が表現の礎になる。

(3) 話すこと

当然のことながら、よく聞く幼児には、思うことや感じる心が育っている。だからといってよく話すとは限らない。そこでは、話させてやる機会を作ることが必要である。

平成21年4月1日施行の『幼稚園教育要領』⁶⁾では言葉領域のねらいは次の通りである。

①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう

②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう

③日常生活に必要な言葉が分かるように絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる

現代社会においては、テレビゲーム、パソコン等の発達により、幼児の世界にも深く浸透し、言葉を獲得する上でも大きな役割を果たしている。機器からの言葉の獲得は時に無機質なものであり、言葉数を増やすだけの役割になっていることが多い。幼児が言葉を獲得し話すのは、他者とのコミュニケーションを図り、情緒の安定を図るという大きな目的がある。コミュニケーション能力をつけるために、家庭・地域・幼稚園や保育所・学校においては、言語能力、想像する力、創造的に生きる習慣を身につけさせることが急務であろう。なかでも言語能力については、言葉数を多く獲得するだけでなく、真心を言葉にすること、感じる心や思う心を日常生活の中で培うトレーニングが必要になってくる。

(4) 表現すること

言葉の獲得はしているものの、幼児期には身振り手振りの表現もまだまだ欠かせない方法である。神谷栄司は『幼児のものの見方・感じ方』⁷⁾で「身振り表現はコミュニケーションの働きをする。身振り表現は幼児の独特のことばと考えてよい。身振り表現は眼に見えると、ということ視覚的コミュニケーションの担い手である。幼児期は言語的コミュニケーションと視覚的コミュニケーションが重なり合い、子ども達のあいだで、それぞれの思いを深く交流することが可能になる」と結んでいる。幼児の表現には言語表現と身振り表現が重なり合っていることを保育者は認識し、幼児の表現を捉える必要がある。

実践例でも示した通り、幼児の表現では、蝶々も自分達と同じように家族があり、お父さんやお母さんがいると感じていることがうかがえる。また、小さい蝶々(生まれたばかりの蝶々のこと)は、上手に飛べないことやじっとしていることに思いを抱いている。これらは、幼児期によく見られるアニミズム的思考『幼児のものの見方・感じ方』⁸⁾「生命のないものに生命を与え、精神のないものに精神を与える(ピアジェ)」というもので蝶々を通して人間社会のことを理解していくものと解釈できる。こうしたものの見方・感じ方が幼児期の独自性

であると捉え、幼児の心を育てる基になっていくもの
と考える。

おわりに

平成20年は、年始めから通り魔殺人という凄惨な事件が続いた。その中で「殺す相手は誰でもよかった」とか、「自分の意見を聞いてもらえなかった」等の容疑者や、犯人の声が聞かれた、何と自己中心であろうと驚愕した。幼児期からの自己を語るトレーニングが不足していたのではないかと、その重要性を感じた次第である。そこで、本稿のまとめとして、次のような結論に至った。

幼児の表現力を培うということについて、身振り表現と言語表現に焦点をあてて述べてきた。表現技術を身につけることや多くの言葉を獲得することも大事であるが、まずは、表現したいという事柄を有していることが何よりも重要であることが確認できた。幼児には、表現すると言っても術もなく、語彙が少ないため身振り表現が先行することが多い。しかし、幼児は体験したことについてその意味を納得し、理解できた時には充足感や開放感を感じ、それを喜びとして表現しようとする力があることも今回の研究で明らかになった。喜びを体で表現する術（身振り表現）は、幼児の発達上必要なことであるのだと確信する。言葉を獲得する過程は多々あると承知した上で、身振り表現と同様に言葉の表現についても、思いを引き出すための表現活動としてとらえ、そのための感動体験や表現する機会を作るのは、大人の責務でもある。各自の表現が人に受け入れられる関係が作られていくことを、小・中学校等では自尊感情や有能感といった言葉で表わされる。幼児も同様である。自分の良さを感じつつ前向きに取り組もうとする気持の育成にもつながるものとして今後も育てていきたい。表現指導が豊かに保育や教育の場で行われることを切に願う。

引用文献

- 1 服部祥子（1995）『子どもが育つみちすじ』P61. P62
朱鷺書房
- 2 八木英二編（1990）『保育の原点をさぐる』P53 ぎんのすず
- 3 無藤隆（2008. 8）『幼稚園教育要領改訂のポイント』P6
www.benesse.co.jp/jisedaiken/booklet/pdf/booklet-01-1pdf
- 4 宮本茂雄（1982）『発達と指導Ⅲ』P9. P10 学苑社
- 5 広岡キミエ（1991）『幼児の内面を育てる』P100 ひと

なる書房

- 6 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』P7 萌文書林
- 7 神谷栄司（1998）『幼児のものの見方・感じ方』P39 法政出版
- 8 神谷栄司（1998）『幼児のものの見方・感じ方』P48 法政出版

